

初志とはなにか

上 田 薫

「考える子ども」が百号を迎えた。隔月刊であるから、十七年になんなんとする年月である。民間教育団体として決して古いとはいえないけれど、いわば徒手空拳をもって今日に至ったことを思えば、顧みて深い感慨をおぼえないわけにはいかない。虚心に力を合わせて会をもちたてられた会員と誌友とに、心からなる謝意を表すものである。

会の名称に初志ということばを据えることについて、会のなかからもかつていくたびか疑義が出された。しかしもはや今日において、なんびともわたくしたちの会をこれ以外の名でよぼうとすることはないのであろう。真の社会科が谷間の底にある暗い時代、わたくしたちはこの会を生み、守り、育ててきた。このトンネルがいつ終わりになるかは知らない。夜明けは近いようでもあり、またいつか遠ざかってしまうものであるかもしれない。しかしいずれにしても、逆境を歩きなれた者に対しては、希望も恐怖も歩度を乱すだけの力はもちえないと確信する。

社会科の初志はつねにわたくしたちとともにある。いやわたくしたちのなかにある。ではいったいそれはいかなるものであるのか。この誌上においてすらも、初志はついに明らかにされたことはなかったのではないか。あるいはそうであったかもしれない。初志の定義はついになされなかったかもしれない。しかしもしそうであったとしてどうなのであろう。初志は内容のない飾りにすぎなかったのか。回顧的なムード以上のものでなかったというべきであるのか。わたくしはまさに百号においてこの問いに答えるということに、むしろ初志の会の意義を、それ以上に初志の会らしさを感じずるものである。初志はつねにわたくしたちのなかにあった。そしてそれがなんであるかを問われつづけてきた。それゆえにこそ百冊目の雑誌は、わたくしたちの前にあるのである。そういう会と雑誌とに魅力をおぼえる人間が日本の教師のなかにいたという事実が、初志の会の歴史であり、また存在理由だといっただけではいけないのであろうか。

社会科の初志とは、もちろん昭和二十二年社会科出発のときの精神をさす。一般的な言いかたをすれば、それは経験主義による問題解決学習の社会科の考えかただということが出来るであろう。一応はそれでまちがっていない。しかしもしわたくしたちの会のなかに脈々と生きるなにかをじかに問おうとしたならば、そのような概括ではどうも満足できないはずだと思うのである。初志は経験主義ではあるけれども、世間でいうところのそれとはかならずしも同じではない。問題解決学習についても同様である。初志は決してムードではないが、概念的位置づけにはかんたんに服しないなにかを含んでいるのである。

初志は情緒的でないにもかかわらず概括を拒否しようとする。その秘密こそ、まさに初志の本質をものがたるものである。わたくしたちは「一人ひとりをたいせつにする」ことに徹しようとしてきた。しかしそれはよくきめつけられるようなチャイルド・センターと

いうあまい立場ではないのである。”子どもを大事にすることを第一に”ということできないのである。初志の本質はまずなによりも人間尊重ということにある。現時点でいうならば「人間回復」ということにある。人間をずたずたにしたものへの激しい抵抗、それ以外に初志の精神はない。そしてそのことが教育の理念として、第一に「学問観の変革」としてあらわれたのである。

アカデミズムへの挑戦、それがどのくらい至難のことであるかは、実際に血を流して苦しんだ者しかわからないのであるかもしれない。初志の会が暗い谷間に追いこめられたのも、その根因はこの大それた戦いのせいであったといわなければならぬ。大学紛争において、それはひとたび揺れ動いた。しかし今は前にもまして磐石のごとくであることを見ても、その力のほどは容易に推しはかれよう。系統主義という教育的立場は、明白にこの古きアカデミズムの申し子だったのである。保守革新を問わず、アカデミズムの弊の深刻さには、だれもが手をこまぬかずにはいられないのである。

初志は無謀にもこの巨大な怪物にまっこうから挑みかかったのであった。学問を生きた人間のためのものとするために、学問がその抽象的権威によって人間を奴隷とすることを絶対に防ぐために、初志はあえて苦難の道を選びとったのであった。子どもを大事にするということは、ただその結果として生じたことにすぎないのである。教育における人間疎外への戦いこそ、初志をつらぬく会の根本的使命だといわなくてはならぬ。

一人ひとりを生かせということ、今日では多くの人が口にしている。しかしアカデミズムの弊に対して、体系系統の呪縛に対して、すなわち一般性のモンスターに対して、勇敢に正面から戦いぬくことをしないで、どうして生きた個性的人間一人ひとりが生かせよう。初志のみが人間一人ひとりの真実に忠実でありうるのである。人間に対するこの誠実さを欠いて、どうして意味ある社会変革が成立するであろうか。

子どもにとって楽しい社会科をとわたくしたちは願っている。それもまた初志の精神である。しかしその楽しさは、子どもの好きなことができるからということにあるのではない。抽象によって人間を責めあげることが打ち破られたことからくる楽しさである。もちろん初志は、ただ秩序からの解放だけを求めているのではない。柔軟にして強靱な動的秩序を確立することこそ、本来目指すところなのである。そしてそのような具体的秩序は、子どもにとって、人間にとって決して”楽ではないにもかかわらず楽しい”ものなのである。人間をちっ息させようとするもの、二重人格におとしこもうとするものを駆逐することは、同時に当然人に自己統一のきびしさを容赦なく迫らずにはいない。

◇ ◇ ◇

わたくしはここで初志の特質と考えられることを四つあげておきたい。それは学問観の変革の具体化であるとともに、またその根底をなす原理であるともいうことができると思う。すでに言うまでもないことであるけれども、初志には強靱な理論がみなぎり生きている。

第一にそれは徹底的に懐疑するという精神である。初志をつらぬく会の当初の綱領を知

る人は、そこにこの精神が端的に表記されていたことを思いおこすであろう。懐疑に徹する人間にとっては、いかに強大な権力も権威も脅威となることはないのである。そこにはつねに圧力への不屈の戦いがある。淡々として少数者であることをおそれない粘り強い生きかたがある。

第二は教師につごうのよい拠点に安住することをやめるということである。すでに言った体系系統というものがそれであった。それはたんなる手段にすぎぬものであるのに、教師は絶対的な目的のように思いなして、その上に安坐しようとしている。その呪縛から解き放たれるとき、教師ははじめて自立しうるのである。とくにこの見地に立つとき、一個の便宜的手段にすぎぬ”教科”というものの不当なくびきは、人間をむしばみ去勢するという点において、比較を絶するほど大きいということができらるであろう。それは教師がたんに約束として暫定的に組み立てたにすぎぬものであるのに、人間をほしいままに分断して平然としているのである。このときかの古きアカデミズムが、なんの根拠もなく、しかしすこぶる威圧的に、その閉鎖と分断を押し進めていることは、あらためて言うまでもない。

第三は事実をたいせつにするということである。生きた事実、割りきることのできぬ事実を重んずるということである。事実は生きていれば生きていくほど多様な解釈をひきおこす。いいかえれば、とらえる者の価値観からどうしても自由になりきれぬものが生きた事実なのである。事実をもはや疑う余地もないものとしてとらえるのは重視ではない。新しい疑問がつねに生まれていくプロセスを大事にしてこそ事実の尊重はある。問題解決学習こそ事実を生かすものだという主張は、ここにはじめて成立するのである。

事実をとらえること、すなわち認識に価値観がかかわるゆえに、知識は相対性をもたずにはいない。価値観はさまざまあるからである。そのさまさまの価値観にかかわって道徳的行為が成立するゆえに、知識と道徳は不可分の関係をもつのである。初志の立場においては、道徳を教科とすることは容認しえざることであった。その拒否が事実の尊重に由来するものであったことに、多くの人びとは気づいていない。

さいごに第四は、結論よりは過程を重んずるということである。結論はしばしば唯一の正解の発見ということで考えられるが、正解がただ一つに固定されるということこそ、知の本質への背反であり、生きた人間を否定することにほかならぬ。人間の知的発展は、ずれを媒介にしつつ、たえずあらたな疑問を生んで個性的に進んでいく。まさにこの過程以外に真に実在するものはないのである。つまり、またつまり切歯して歩んでいるからこそ人間は生きている。割りきることによって馴れきった人の眼には、それはいかにももどかしく中途半端にうつるであろう。けれどもこの見場のわるい中途半端のまま自分をしっかりとささえて追究しつづける点においてはじめて、人は真実に肉迫することができるのである。

中途半端であることを積極的に評価する考えかたは、まことに異様なものに受けとられるに相違ないと思う。しかしなにかに寄りかかって、あるいは自分の思いこみだけで中途

半端をのり越えたところでどうなるであろう。そういう粗雑な割りきりは、必然的にこと
がらのあとしまつをおろそかにすることを招く。人間のもっとも人間的な面を無残に切り
落とす愚行をあえてすることにおちこんでしまう。どんなえらい人だって、中途半端から
は脱出できないのだ。ただそのことをどう自覚し、現在の中途半端をどう変えようとして
いるかが、人間の値うちのきまるところなのだ。だから初志の人たちは権威をおそれない。
そしてその一方、教室の片隅に起こったほんのささやかなできごとにもごくしげんに凝視
の眼を向ける。

今日の社会は多くの面で行きづまっている。人間回復こそ打開のかぎだといわれる。け
れどもその人間回復は、たんなる技術の開発などではどうすることもできないのである。
かといって抽象論の積み重ねでも事態はいよいよ悪化にむかうだけであろう。ではとりう
る道はなにか。教育についていうならば、教師が自分を具体的に裸にできるということこ
そ、前進に緊要な第一歩であるとわたくしは思う。裸になるとは、自己防衛を捨てるとい
うことである。どんな名分があるにせよ、防具に身をかためて子どもの前に立つことはや
めるということである。もしそれができるならば、子どもに驚きをもつことによって、自
分をゆり動かすことのできる柔軟な教師が生まれるであろう。初志はそういう教師を望ん
でいる。

人類はいまどんな展望をもっているか。初志の精神がそれに大きなかわりをもつとい
えば、人は誇大妄想とわらうかもしれぬ。しかし「中途半端のきびしさ」を痛切に自覚し
ないかぎり、もはや人類にはいうべき前途はあるまいと、わたくしは思う。

(立教大学文学部)

(『考える子ども』1975年3月号より)